

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】

俺とところてんのリリカル世界冒険譚

【作者名】

鷹売りのタカさん

【あらすじ】

そこには、『プルンッ』がいた。

とても言葉で表現できそうにない。そう、言うなればあれは『プルンッ』だ。もしくは『プルプルンッ』だ。

半透明で、ところどころ角ばった体躯……そんなもって『プルンッ』。

そう、まぎれもない『プルンッ』が、悠然と佇んでいた。

……にじふぁんで連載していた「俺とところてんのリリカル世界冒険譚」を、こっちではまったく新しく作り直して書くことにしました。

俺ととじろてんの邂逅

小学校、中学校、高校共に安定した成績を保持し、さらに大学受験も安定して合格、友達いっぱい、でも彼女はいい、そんな順風満帆な生活を送っていた一人の青年。名を、天野城助と言った。

雪の積もる1月の半ば、路面は凍り、交通事故の危険がいつそう高まる季節。彼はスーパーで夕飯の買い物をしていた。そして店を出た矢先、一台のバスが彼に突っ込んできた。バスはそのまま止まらず、近場の民家の塀に突撃。バスは停止し、幸いにも乗客は全員無事。あったとしても打撲程度の軽傷を負ったのみ。しかし、バスのフロントに礫にされたまま塀に突っ込んだ城助は無残にもバスと塀に挟まれて圧死してしまった。

バスのタイヤが突然パンクし、何故か全てのタイヤのチェーンが外れ、路面が凍っていてブレーキもきかない。一生に一度お目にかかれるかという不幸な偶然が原因で起こった事件である。

そんなこと死んだ今となっては関係ないと言わんばかりに無然とした態度で、天野城助は地平線の果てまで見渡す限り真っ白な謎の間で、これまた真っ白な衣装に身を包んだ一人の老人の前に立っていた。

聞けばその老人は神だという。城助はそこに驚くよりも、かつて中学2年生の頃、無神論者をきどってかっこつけていた自分を思いだし、赤面。蒸気が上がるほどに体内の全水分が沸き立っていた。

神と名乗る老人はそんな城助の様子などお構い無しに、淡々と説明をする。

神曰く、城助の死は下級神による因果律操作のミスであるということだ。そしてこの空間は俗に煉獄と呼ばれる場所であり、とある偶然から命を落とした城助は、せめてもの詫びとしてこの後とある世界に送り、第2の人生を歩んで欲しいとのこと。

城助は言う。「それが貴様らの誠意か。一度終えた人生は二度と戻らぬ。友人の菓子を食べてしまい、代替品でごまかそうとするガキの発想とまるで変わらない。それでも神か。上司にペコペコ頭下げて責任の重みを噛み締めていた親父の方がよっぽど尊敬に値する。人間社会を嘗めるなよ腐れジジイ」

対する神は、厳しい目で城助を見据え、言った。「ならば一つ願いをかなえてやろう。来世への手土産だ」

「喜んで転生させていただきます」

彼は現金な男だった。

それから10分、たった一つの願いに対してあーでもないこーでもないと思ひぬいた末、城助が出した答えとは『友』だった。

城助は順風満帆な人生を振り返り、笑顔だった自分の隣には、いつもつるんでいた親友がいたことを思いだした。

彼は言う。「富や名声なぞより友情よ」

神はその願いを聞き入れた。「来きたる人生の分岐点、そこで最高の相棒を送る」

城助は笑顔で頷いた。そして、次第にその姿は薄れていき、やがて

そこにはなにもなかったかのように、城助は姿を消した。

神は思った。そういえば送った世界めっちゃ危険だった、と。

神直々の加護を受けた人間は何故か普通の人以上より特殊な人生を送りやすい。例を挙げれば、突然宇宙に行って戦ったり、超能力に目覚めて正義のヒーローとして悪と戦ったり、謎の組織の特殊遺伝実験でミュータントとしての生を受けたりなどである。過去に何度もそんな光景を見てきた神としては、こちらのミスで死んでしまった城助にこれ以上無茶をさせるのは心が痛む。そこで神は、独断で城助に特殊な能力を授けようと考えた。それならばたとえ謎の魔法使いに襲われようと簡単にやられはしないだろうと思った。

しかし、彼は疲れていたのだろう。

無理もない話である。彼はここしばらく自身の仕事が忙しく口々に寝ていない。そこでもさかの部下の重大なミスにより因果律が狂い人間が一人死亡。やれ責任問題だの、やれ始末書だのと仕事が激増。城助は神の誠意が足りないと言ったが、精神状態がオールブルーな状態でまともな対応が出来るはずもなかった。加えて一つの伝え忘れにより、さらに仕事の一つ追加。

栄養ドリンクの空き瓶が山のように積み重なった執務室で、神は疲れきった頭を必死に回転させ、城助へと送る『能力』、そして『友』を考えた。

「天野城助天野城助天野城助アマノジョウスケあまのじょうすけてんのしろすけ・・・む？ てんのしろすけ、てんのすけ・・・っは!!」

神は脳に電流が走ったかのように感じた。その閃きに神は歓喜していた。そしてその結果を記した紙には、こう記載されていた。

『世界：魔法少女リリカルなのは』

『能力：ポーボボの作品の能力全部』

『友：ところ天の助』

もう一度言おう。彼は疲れていたのである。

*

・・・・・・・・・・・・・・・・むむ、ここは何処いここか。

先程は煉獄と呼ばれる真白な空間にいたが、今度は逆に真暗な空間でたいへん困惑している。身動きも取れん。面妖な。

いや、つてか目閉じてるだけじゃね。

まあ、瞼も動かないから何でもいいか。

おっと、ここで重大な問題が発生した。俺って　　息できッ
ねッガフツゲホ!!! やべえ、マジやべえ・・・目覚めていきなり溺死

とか笑えんぬ……。

おっと今度はなにやら俺を押し出そうとする動きが……!! 一体どこに運ばれるのかは知らないが……この空間から出られるなら万々歳だ。

さあ……視界が明るくなってまいりました。しかし瞼は依然として動かない。そして一つ……喉に何かがつつかえているかのような違和感がある……!

こういう時は思い切り叫べばいいんだ。そう言ってたんだ、ばあちゃんが。ばあちゃんのいう事に従って間違った記憶はない。

見せてやれ! おばあちゃん子大和魂!!

せーのッ

「おぎゃああああああああ!! おぎゃああああああああ!!」

あれ? 俺こんなシャウトするつもりはなかったんだけど……。

「産まれた! 産まれましたよ、天野さん!! 元気な男の子です!!」

俺の目の前で満面の笑みを浮かべている白衣のおばちゃんは何者？

「良かった・・・本当に・・・」

そんでもってこの満身創痍な表情の別嬪さんは誰ぞ？

「産まれた!? 産まれたのか!?! よくやったぞ!!」

そいでこのダッシュでやって来たスーツの似合うダンディガイは何奴？

よく見れば後者の二人は俺の両親にえらく似ているな。

しかも何だろう・・・この違和感・・・なんか妙に体が動かない・・・しかも俺の母親にそっくりの別嬪さん、俺を持ち上げてる？

俺ってそんなに小さくなかったような・・・

あつ。

俺転生したんだ。そいでもってここはアレか。曰く産婦人科と呼

ばれる施設か。んでんで、この二人は俺の両親か。

とりあえず挨拶は重要だよな。たとえどんなになっても礼儀は失
うなつてばあちゃんがいつてたし。

最初の挨拶だ。気合入れるぜ。ばあちゃん、俺に力を！

「Hello・My mother and father」

「!!?」

こうして俺の第2の人生が始まった。

願わくば、美しい人生であるように……。

*

なんて思ってたのは何時の頃だったろうか・・・0歳の頃か・・・。

俺が天野城助として第2の人生を歩み始めて6年程が過ぎた。

最初のころは楽しかった。そりゃあもう楽しかった。心は大人で0〜2歳の時を過ごすのは些か苦労したこともあったが、今ではそれも最高に楽しい思い出だったと言える。

本来だって、今も楽しい気分でいられたはずだった。

3日前に・・・家族が死ななければ、ね・・・。

3日前、俺の小学校の入学式が近いということがあって、我が家のテンションはとんでもなくくらいに上がっていた。テンションが最高潮に達している父がある提案をしたのだ。家族揃って俺の入学を祝って旅行でもしよう、と。行き先は国内の温泉だった。そこそこの距離はあるが、有名な観光地らしく、県外はおろか外国人からも一目置かれる場所らしい。

思い立ったが吉日と言って、我が家は慌ただしく旅行の準備に取り掛かった。そして準備が済むと一目散に車に乗り込み、目的地へ向けて出発した。

時間は朝の10時ほどだったと思う。天気は晴れで、太陽の光が心地よかった。ここ4日間くらい酷い雨が降り続き、憂鬱な気持ちになっていた。そんな気持ちを春の暖かい陽気と、車の窓を開ければ流れこむ心地よい風が浄化してくれているようだった。

しかし、そんなとき事件が起きた。目的地に行くためには山道を通らなければならない。本来なら安全な道なのだが、先ほども言ったとおり、ここ4日間は酷い雨が降り続いており、かなり地面が柔らかくなっていたのだ。

そして案の定、土砂崩れが起きた。

荒波のように俺たち一家の乗った車に襲い掛かる土砂は、あっという間に車を呑み込み、押し流していった。

最後に見たのは、俺と同じ後部座席に乗っていたじいちゃんとおばあちゃんが、必死に俺を抱きしめようとしている姿だった。

結果として俺は助かった。俺だけが助かった。祖父母が命を掛けて俺を守ってくれたおかげだった。父は母を守ろうと抱きしめていたのだが、2人とも結局死んでしまった。

こうして俺は家族を失った。

親戚一同が集まって、家族の葬儀を執り行ってくれた。そのことは非常に感謝している。しかし、その後の親戚同士の俺の今後のこと

に関しての責任の押し付け合いを見てたら、感謝の気持ちも少し薄れてしまった。

今はただ一人になりたかった。そう思って式場を後にし、誰もいなくなった家に帰った。

電気もつけず、リビングのソファにポツンと座り込んでいた。聞こえるのは時計の針が動く音のみ。その音すらも鬱陶しいと感じるほどに俺の心は荒んでいた。

そうして何時間経っただろうか。時刻は既に夜中の0時を迎えようとしていた。

俺は鉛のように重く感じる体を引きずるように動かし、台所へと足を運んだ。そして棚から包丁を1本取り出すと、静かに喉元へと運んだ。

「あの時計の全ての針が重なった時、俺はこの世を去ろう」

そして数分が経ち、0時まで後10秒というところまで迫っていた。

9 . . . 8 . . . 7 . . . 6 . . . 。

心の中で静かにカウントする。

5 . . . 4 . . . 3 . . . 2 . . . 1 . . . 0 。

「ちよつなら、第2の人生」

そう言って、包丁を握る拳に力を込めた。

その時だった。

部屋中をまばゆい光が覆った。

突然のことで驚いた俺は、思わず包丁を落とした。そしてあまりの眩しさに耐え切れず、目を閉じ、腕で更に目を覆った。

約10秒。光はやっと収まった。

目を開き、部屋を見渡す。一体何が起こったのかと思い、部屋の中
央に目を向けた。

そこには、『プルンッ』がいた。

とても言葉で表現できそうにない。そう、言うなればあれは『プル
ンッ』だ。もしくは『プルプルンッ』だ。

半透明で、ところどころ角ばった体躯……そんなもって『プル
ンッ』。

そう、まぎれもない『プルンツ』が、悠然と佇んでいた。

「…………おまえ」

謎の半透明の生命体(?)は、俺に目を向け、話しかけてきた。

一体何を言うのだろうか。もしかしてあれは宇宙人か。それならある意味納得である。そうなると俺はこの後連れ去られるのだろうか。そしてどうなるんだろう…。『プルンツ』とした星の『プルンツ』とした住人に『プルンツ』とした実験で俺も『プルンツ』にされるのだろうか……。

やべえ……大分混乱してる……落ち着け、天野城助。今の俺は見た目は6歳だが、心はしっかり成人しているんだ。こんなことで取り乱して入られない。

さあ、名も知らぬ『プルンツ』よ。その第一声や如何に……!!

「……………ん臭いぞ」

「おまえだツ!!!」

想像もしてなかった一言に思わずツッコンでしまった。そして分かった。

「コイツ……ところてんか……」

そして謎の『プルンッ』改め、謎のところてんは俺の顔をじっくり見ると、言った。

「おまえ、酷い顔だな……死んだ奴みたいだぞ」

そう言われて俺は顔に手を当ててみた。当然分かるわけがなかった。しかし、このところてんがそういうならば、今の俺はとても酷い顔をしているのだろう。なんせちよっと前まで死のうとしていたくらいだ。晴れやかな顔をしているはずがない。そう思うと、死んだ奴みたいという表現は、中々的を射ている。

「……うんざい……余計なお世話だ……」

「……まあ、何があったのかは大体分かっている。おまえの事情も神つてやつから聞いて知っている。……とりあえず、今はその話は無しにしよっ」

そう言つてところてんはどこからか、非常に大きな皿を取り出した。そしてそれを、机に乗せると、今度はところてん自身が「よっこいしょ」と言つて皿の上に寝転がった。

そして机の上の醤油を手にとると、何を思ったのか、自分にかけた。

「おめ
「おめ
喰くせ」

ところてんは自信満々といった声で言い放った。

俺はただ静かに、台所から箸を取り出し、ところてんの寝そべるテーブルに向かい、席に着いた。そして、ところてんを食べた。ただおもむろにところてんを口に運び続けた。

何故かはしらないが、俺の目からは涙が溢れ出していた。拭っても拭っても涙は止まらず、俺の顔面を濡らしていた。涙を拭うことを諦め、顔を涙でぐしゃぐしゃに濡らしながら、ところてんを食った。

「不味い」

俺は呟いた。

それを何も言わずに、ただ見ているところてんはあることに気がついた。

オレ・・・食われとるがな

オレもまたあることに気がついた。

ところてんは醤油よりポン酢の方が合う

俺とところてんの旅立ち

あらすじ・生まれて初めて、生きたところてんを食べました。でも、おいしくありませんでした。」

「で、おまえは一体誰だ？」

ところてんの頭と腕を残した全ての部位を胃袋に納めた俺は、早速思いついた疑問を口にした。

頭と腕だけになったところてんは涙を流しながら、「こんなに食べてもらったの初めて……」と嬉しそうにしていた。そこは別に良かったのだが、涙を拭っている右手に握られたハンカチにびっしりと書かれている「ぬ」という文字を見てみると、なんだか無性に鬱陶しくなったので、無言でひったくって放り投げてしまった。

ところてんは驚きと悲しみが合わさったような表情で「ぬのハンカチ」と叫んでいた。何故だか知らないが、不思議と罪悪感が湧かない。このところてんに対して全くと言っていいほど罪悪感が湧かない俺は心の荒んだいけない子なのだろうか、とちょっと自分を責めた。

「くっ……いっ……ありえねえ……人間じゃねえよ……」

「頭と腕だけの奴にありえねえって言われた……おまえそれどうにかならない？」

「なるぞ。ちょっと待ってる、今から生やすから」

「生えんのツ!?!」

「ん~~~~~~~~あふんツ!!!!」

「ニヨキ

「生えたツ!? ニヨキって生えた!!? ってか掛け声キモツ!!」

最近のところてんは無くなった部位を生やすことができるんだと大変感心した。

ところてんは生えた部位の調子を確認するように足をしきりに動かしている。ドラ ンボールみたいだなとか思ったり思わなかったりしている俺は、いい加減このところてんの素性を知りたくなり、先ほどと同じ質問をぶつけた。

「言い忘れていたな。俺はところてんの助だ。神って奴におまえのところに言っって手助けをしてやれっって言われて来たわけだが・・・」

「そうか。ちなみに俺は天野城助だ。よろしく」

ところてんの助という名前を聞いて、俺は生前読んでいた『ボボボボ・ボ・ボ・ボボ』というマンガのことを思い出した。道理でどこか見たことあると思ったわけだ。

・・・というか、生きたところてんという点から真っ先に思い出せなかった自分が悲しくなってきた。

「手助けって言われても、特に助けてもらうことってないぞ」

「いや、なんか俺もよく分からねえけど、ここはおまえの前世に存在したアニメの世界らしい、えっと確か・・・」

「なんだなんだ？ 俺前世じゃあ結構マンガとか好きだったからそういうの大体分かるぜ」

「分かった・・・え〜っと・・・長かったんだよなあ・・・『非行少女クリティカルラクダ』？」

「ねえよんなモン!! あつてたまるか!!!」

「そつだそつだ、神からおまえ宛の手紙を預かってんだ。それに書いてあるはずだ　ほらよ」

天の助から2枚の手紙を受け取り、それに目を通した。

~~~~~

天野城助君、ご機嫌はいかがかな？まあご家族のことがあるからあまり良い気分ではあるまい。

まずはそのことについて謝りたい。

我々神によつて意図的に転生させられたものは、加護の様なものを生まれつき授かっており、何故か普通の人間より特殊な人生を送りやすいのだ。多分君に突然訪れた不幸な事件も、その特殊な加護によるものだと思われる。

我々の所為で辛い思いをさせてすまなかったと心より思っている。

さて、話は突然変わるが、君のいる世界は、曰くアニメの世界という奴なのだ。『魔法少女リリカルなのは』というアニメのだが、聞き覚えはあるかね？

このアニメの世界について、一見するとなかなかかわいいらしいアニメだが、かなりの危険も孕んでおる。神の加護を受けたままでそんな世界でまともにも生きていくのは大変困難だと思える。これまでに何人か、別の世界に君と同じく転生をしたものがあるのだが、その者達は皆一様に特殊な能力を授けてもらえるように我々に願っており、特に手助けはしなかったのだが、君の場合は友達を一人要求しただけで特殊な能力は備わっていない。

よつて、私の独断で、君に特別な能力を与えようと思ったのである。

君が生前『ボボボーボ・ボーボボ』を全て読んでいたことは知っている。なので、君にはその作品における能力である『真拳』を授けた。真拳以外の能力も一応使える。

『真拳』には、何かと細かいルールが多い。よつてそのことについても

説明しておきたいと思っている。

・毛の王国民と同じく、体内に『毛玉』を有している。また、毛玉はリンカーコアと融合している。

・バビロンの試練を終えた状態

・オナラ真拳の封印は解放済み

・オブジェ真拳の奥義を使うために、真拳使いのエネルギーの代用として、魔力を使用できる。

『闇拳』の使用は可能だが、闇の世界がないため『闇継承の儀』は行えない。

・レアスキルとして『ボケ殺し』がある。これはON・OFFを切り替えるため、体のどこかにスイッチを付けた。

・極悪斬血真拳、プルプル真拳、夏真拳など、武器や体の性質によって使用できる真拳は、使用する度にその真拳にあわせた武器を召喚できたり、体質に変化させる。

・カンチヨー真拳に命を掛ける必要はないが、代わりにその日は真拳などが一切使えない。

・信じれば空が飛べる。

こんな所だろう。他にもいくつかあるが、重要なのは上記のものくらいだろう。

また、君のレアスキルとして『ギャグ補正』がある。これがあればまず簡単にやられはしまい。

さて、また話は変わるが、今度は非常に重要な内容だ。

その世界だが、君の転生の際に、またへまをやらかした神がある。その所為で、本来の因果律から少し外れてしまい、物語とは違ったことが起こってしまうようになってしまった。

そこをお願いだ。その因果律の修正を、天の助と共にやってはくれないだろうか。勝手なことを言っていると思うだろう。しかし、そこから干渉してもらうのがもっとも解決への近道なのだ。

解決のためには、『海鳴市』という場所に行かなければならない。そこが物語の舞台なのだ。住居もこちらで準備する。君が天の助と2人で住んでいても問題が無いように情報操作もする。

もちろんこれは強制じゃない。君には当然断る権利がある。

この町に残って天の助と2人で住んでもらっても構わない。その時は、君に住みやすいよう情報を操作しよう。

焦らなくても良い。じっくり考えてくれ。物語の開始にはまだ十分時間がある。

私からは以上だ。後は君に任せる。君たち2人の息災を願う。

神より

~~~~~

「ボーボボって地味に細かい設定あったんだな……」

俺はまずそのことに驚いていた。小学生でも理解できるシンプルなギャグ漫画だったのだが、改めて設定を考えると、細かいものがいくつかあったのだとしみじみと思う。

そして、『魔法少女リリカルなのは』か……。見たことがないアニメだ。なんとかなると良いが……。リンカーコアとかレアスキルってのは、このアニメの設定なんだろうな。

まあ、一ついえる事があるとするなら、この文面。

「レアスキルとして『ギャグ補正』がある」

『ギャグ補正』

神はなんてものを与えてくれたんだろうか。

これで心臓を貫かれようが、いくら血を吐こうが死ぬことはない。どんな大きな爆発に巻き込まれても、服が多少煤けて髪の毛がアフロになる程度の被害で済む。素晴らしいスキルだ。

しかし、神も中々厄介な用事を頼んだものだ。

「なあ天の助。海鳴市って場所は知ってるか？」

「ああ、一応聞いてるぜ。行くのか？」

「そうする。どうせ」にいても嫌な思いをするだけだ。また何時死にたい気分になるか分からない。なら気分一新って意味で新しいところに行かせてもらおう。アフターケアもちゃんとしてくれるって言うしな」

「よし、じゃあ行くか」

「ああ、海鳴市へ」

「ううして、俺とところてんのリリカル世界冒険譚は始まった。

*

「そういえば天の助。この手紙のポケ殺しのスイッチってのはどこにあるか知ってるか？」

「いや、聞いてないな。体触ってたらパカッて開いてその中にあるかもしれない。ちょっと探させてくれ」

天の助は言うと同時に俺の体を触って確かめだした。

「いや、開くわけねえだろ。生まれて6年間も共にしていた体だぞ。あるわけ　　」

パカッ

「あつ、開いた」

「マジでッ!!? スゲーッ!!! 6年間共にした体の思わぬ真実!!?」

俺の胸の部分が扉のように開き、その中に『魚雷スイッチ』と書かれた怪しげなスイッチがあった。よく見ると、スイッチには『ON』と『OFF』と言う文字が書かれており、『OFF』の部分に赤いランプが点灯していた。

「・・・・・・・・なあ天の助、これは『ON』にしない方がいいと思う」
「・・・・・・・・嫌な予感がする。そっと閉じて見なかったことにするか」

そして天の助が扉を閉じようとした時だった。

「よし、閉じる・・・・・・・・は・・・は　　ストロベリー青春白書ハクションッ
「!!!」

「どことなくしゃみだよ　　」

カチッ

『OFF』 『ON』

「あ

天の助がくしゃみをした拍子にスイッチを『ON』にしてしまった。

そして突然、俺の体に異変が起こった。

天の助を見ていると無性に腹の底が熱くなってくる。とんでもない熱量だ。そしてそれが段々と足に集まっていく。

「ヤベッ！ 逃げろ!!」

「あッ！ 天の助デメエ、一人で逃げようなんて汚ねえ!!! 逃がすかあッ!!!」

「ひいいいっ!! こっち来んな!! オレがあぶねえ!!!」

ボケ殺し、魚雷スイッチ、そしてこの熱量。

大体想像はできている。この後どうなるのかという想像が。天の助もそれを分かっているのだろう。だから一目散に逃げ出したのだ。

俺が天の助だけ逃がすわけにはいかないと思い、追いかけている途中、異変は足にも起こった。

がシャン、ウィーン、ガシヨン、ガシヨン、ウィーンガッシャン

「変形しやがったッッ!!!?」

俺の足がまるでミサイルのように変形したのである。ここまできたらもうどうしようもない。

先ほどの異常な熱量が変形した足の先端に集まっているのが分かる。そして俺の視線が、俺の意思とは別に天の助を捉えている。

まるで『ロックオン』しているように・・・!!!

自分で感じて分かるが、どうやら俺自身に被害はないらしい。

ならば俺がやることは一つ。

一人で逃げたあのところてんに 裁きをッ!!

「くたばれええええええッ!!!!!!」

「グハアッ!!!!」

魚雷となった俺は天の助に直撃し、そのまま天空まで運んでいく。

その後のことはよく覚えていない。

ただ分かるのは、目が覚めたときには我が家がボロボロになったというのと、昨晚に恐ろしい速さの飛行物体があつて、そこから謎の断末魔の叫びが町中に響いていたというニュースがテレビでやっていたということである。

なあ城助、なんで俺が狙われたんだ？

存在そのものがふざけてるからじゃね？

俺とところてんの転校初日

あらすじ・魚雷スイッチ 僕のはどこにあるんだろ
見つけ
くてあげるよ 君だけの魚雷スイッチ

海鳴市郊外の道路は酷く閑散としていた。時間帯は早朝の4時であり、辺りもまだ薄暗く、ロクに車など走っていない。そんな中でも車に乗っている者といえば、配達便のトラック、仕事関係で早朝移動をする者、もしくは旅行者である。

ある男がいた。男は仕事の都合で朝早くから海鳴市を出て、2つ隣の県に行かなければならなかった。仕事のためとはいえ、眠い目をこすりながら車を走らせていることに男は少し気が立っていた。めんどくさい、誰しもが同じことを思うだろうと男は愚痴りながら、眠気を紛らわせるために近くのコンビニに寄って缶コーヒーを購入していた。店を出て早速缶のプルタブに指を掛け、空けようとした所で、ある異変に気付いた。

地鳴りがしている。

地震が起きているわけではない。車の走る音にしては些か荒々しい。トラック野郎が乗り回す馬鹿でかいトラックですらここまでの音は出ないだろう。

音は徐々に大きくなっていく。道路を走っているようだ。

男は気になり、道路に駆け寄って音のするほうを見てみた。

大量の荷物に乗せた人力車。

車を引き、時速80kmは出ているかという速度で走るところでん。

そしてそのところてんを、鞭で叩き、高笑いしながら車の上で足を組んで座っている少年。

「オラオラッ!! そんなんじゃいつまで経っても海鳴に着かねえぞ!!
ハッハッハッハッハ!!」

「風に、風になるんだ……! 僕は風なんだ……!」

「意味分かんねえッ!!」

男は驚愕した。無理もない話しである。

「ん? おい城助、そろそろだぜ!」

「分かってる! ギリギリまで走れよ!!」

その人力車はそのまま走り続け、男の近くでドリフトをかけながら止まった。地面はその摩擦で焦げ跡がついている。

ところてんは人力車のハンドルを下ろし、少年は車から降りた。そして2人は向かい合い、何かの武道の試合のように構えあった。

緊張した空気が走る。男はなにが始まるのかと、その2人の一挙手

一投足に気を配った。

約10秒後、2人は同時に動き出した。

「最初はグー！ ジャンケンポンッ！」

少年の手の形はグー、とろてんの方は パー。

「シャアッ!!」

「クソッ……ここにきて俺の負けかよ……」

「じゃあ今度は城助が車引く番だぜ」

「ちえー、電柱100個目で交代だからな。ちゃんと数えるよ」

「分かってるって、数ごまかしたりしないよ」

「おまえさっき10個ごまかしただろ。忘れたとは言わせないぞ」

「なんのこと？」

「きたないぞ、じじいめー」

「はっはっはっはっはっは」

「小学生の遠足か!!!」

男の叫びを無視して、ところてんは人力車に乗り込み、少年はハンドルを持ち車を引き始めた。瞬く間に車はスピードに乗り、さきほどと同じように自動車以上の速度で走り去っていった。

男は呆然としながらその光景を見ていた。ツツコミどころが多すぎる。ツツコミ暦の浅い男にはとても対処できるレベルではなかった。

世界は広い。世の中にはどんなにツツコミ暦が長くとも、対処しきれないボケがある。

もう一度お笑い芸人を目指そうと、男は思った。

後にこの男は、世界に羽ばたく大スターとなる。そのことを知る物はまだ誰もいない。

早朝のコンビニには不思議なことが起こる。コンビニの店員は静かに微笑んだ。

*

「　　っていつドラマを考えた。どう思う、天の助」

「　　って上の茶番、おまえの妄想かよッ!!!」

馬鹿売れ間違いなしと思っていたのだが、どうやら天の助的にはいまいちだったらしい。

ちなみに上のストーリーは途中までは間違っているわけではないのだ。俺と天の助が人力車でこの海鳴市にやってきたのは本当の話である。

実際はスピード違反という事でパトカー相手にカーチェイスをしながらやってきたのだが・・・。

ともかく、紆余曲折を経て無事海鳴市に到着した俺たちは、神に用意してもらった住居に住むこととなった。前の家で適当に半年ほど過ごしてやってきたが、まるでほんの3日前に建てられたかのような綺麗さである。ごく丁寧なことに生活に必要な家具一式は既に揃っており、特に買い足したりする必要もない。食料も最大で1年はもちそうなくらいある。使命なんて忘れてニートライフを送りたいなんて欲望も湧いてきてしまっ。

しかしそう思うことを見越していたかのように、神はある置き土産をしていた。

それは ある1枚の手紙。

その内容は至極単純なものだった。

” 『私立聖祥大附属小学校』への転校の手続きはしておいた。明日にでも早速登校してもらおう。 ”

実に面倒な話である。ちなみにその手紙の横には謎の箱が置いてあり、空けてみると中には白を基準としたデザインの服が入っていた。どうやら件の学校の制服らしい。

白が基準の制服はあまり好きではないのだが、袖を通してみるとなかなかどうして悪くない。

とりあえずやるべきことは分かったので、適当に明日の準備を済ませて寝ようと思っ。

*

「じゃあ行ってくる。暇だらうけど、適当にのんびりしててくれ」

「気にすんなよ。久々の学校だろ。楽しんでこいよ」

「ああ、じゃあな」

そう言っつて城助は自宅を後にした。天の助はそれを確認すると時計を一瞥し、ニヤリと笑った。

「さて、と・・・行くか」

*

「さて、なんだかんだで到着したな」

私立聖祥大附属小学校に無事到着した城助は、その辺を歩いていった職員に声をかけ、職員室までの道を尋ねた。懇切丁寧に道のりを教えてもらった城助は、初めての学校にも関わらず、迷うことなく職員室にたどり着くことが出来た。

(さて、無事職員室に着いたまでは良かった……しかし聞いてないぞ。面接なんてものがあるなんて……)

城助は3人の職員の視線を浴びながら、面接を受けていた。面接とは言っても高校や大学の面接みたいに仰々しいものではなく、大半はその学校の説明で、その後に簡単な質問を2、3問するというものだった。

堅苦しそうな学校だな、などと城助は思いながら、俯いて別のことを考えていた。

しばらくすると、ようやく学校の説明が終わった。

「ではさっそく質問させていただくよ。小学生のうちにごんなことをやってみたいかな？」

3人の内真ん中に座る、明らかにカツラを被っていると分かるようなおじさんが尋ねた。胸に着いているバッジには『教頭』と書いてある。どうやらこの学校の教頭先生らしい。

(うーん、特に決めていることはない……物語の修正です、なんて言うわけにもいかんし……野球とでも答えておくか)

答えを決めた城助が顔を上げた瞬間、驚きのあまり目を見開いて固まってしまった。

「ふんふんふん　　ふんふん　　」

(なにやってんだこのところでんツ!?)

その光景とは 質問している教頭の頭の上にコンロを置いて、レシピを片手に器用にフライパンを動かして野菜を炒めている天の助がいるという奇奇怪怪な光景だ。陽気な鼻歌まで歌っていて実に憎たらしい。

そんな城助の顔を見て不審に思った教頭は城助に尋ねた。

「天野君、どうかしたかね？」

「あんたがどうしたツ!?!」

自身の頭の上でところてんクッキングが始まっていることに気がついていない教頭は、ただ首を傾げている。

(何だ、このおっさん!? 気付いてないのか!?)

「あ、天の助君。少し火力落としてもらえるかな? 髪にも火がつきそうで不安になってきたよ。あと塩と胡椒は多めで頼むよ!」

「あいよ、教頭」

「気付いてやがったッ!!」

気付いた上で無礼を見逃すとはこの教頭只者ではない、城助は純粹にそう感じた。

「で、天野君。君はなにがやりたいのかな？」

「あ、スポーツです」

「うんうん、いいねえ。早いうちにスポーツをやっておくのはいいことだよ」

教頭はにこやかに笑いながら、満足気に頷いている。「それじゃあ次は」と言っつて、手元の書類に目を落とす。質問の内容でも書いてあるのだろう。さっと目を通して質問すべきことを決めたのか、顔を上げて城助を見やる。

「天野君の」

教頭の一声と同時に、天の助はどこからともなく塩と胡椒の入った小瓶を取り出した。そしてそれをフライパンに振りまいた。

「特技は ファックシヨイッ! あるの ハブシヨッ! か

な　ハクシヨンツ！　？」

（教頭先生たら盛大に降りかかってらっしやる!!）

天の助の振りまいた塩と胡椒は狙いがフライパンから大きく外れ、教頭の顔面に盛大に降りかかっていた。たまらず教頭はくしゃみが止まらずにいる。それでもにこやかに面接を続けるのは教頭としてのプライドが成せる業なのだろうか。

塩と胡椒にまみれ、くしゃみで顔を歪ませている。しかし言葉には出さずとも、教頭の獣のような目は雄弁に語っていた。

私は君たちが父親の玉袋の中にいたころから、こうして苦労を重ねてきたんだ。これまで積んできたキャリアが違うのだよ。そう、キャリアがねっ！　と。

城助は格の違いを思い知った。前世の分を足しても、目の前の教頭の人生には適わない。

城助は何も言わず、教頭に敬意を表した。言葉は不要、そう感じたのだ。

そして同時に感じていた。

これが私立聖祥大附属小学校・・・こいつら、只者じゃねえ。これからの学校生活が楽しみになってきたぜ・・・と。

これからの事を考えるだけで、城助は高まる期待に胸を躍らせていた。

かくして、私立聖祥大附属小学校の面接は数多の犠牲を経て終了したのだった。

余談ではあるが、天の助は完成した野菜炒めを教頭に振舞った後、「塩味が足んねえだろっがッ!!」と怒鳴られながら教頭に蹴り飛ばされ、職員室の窓を突き破ってどこかへ飛んでいった。やはり教頭は只者ではなかった。

*

1年生のとあるクラスでは、一つの話題が生徒達の関心を全て集めていた。

前日、このクラスでは担当の先生に「後日転校生が来る」というこ

とを伝えられていた。生徒たちの話題は新たに加わるクラスメートの噂でもちきりだった。

「ねー、どんな子だと思っ？」

「男子って噂だぜー？」

「えー！ かつこいいのかなー？」

「どうかなー、めっちゃブサイクかもだよ？」

「きつと運動が得意なんだぜー」

「今風なチャライ奴だぜ、きつと」

「ちよつと古風な大人びた子だっっていう噂もあるよ？」

(どうやら生徒達の間で根も葉もない噂が立っているようね・・・)

クラスの担当を勤める女性教員は、生徒達の不安定すぎる情報ネットワークに些か不安を感じていた。

噂の転校生である城助は既に教室の外で先生の入室の合図を待っているところである。転校初日から生徒達にありもしない像を噂されて気を悪くしてはいけない、と気を遣ったことを考えた先生は、手を叩いて生徒達の雑談をやめさせ視線を自身に集中させる。

「「「「」ら皆、あまり適当な噂をたてないの！ それじゃあ入ってもらいましようか。」

天野君、入ってらっしやい」

先生の判断は大変正当なものと言える。しかし人の口に戸は立てられぬという言葉があるように、一声で生徒達の声が止むわけもなく、今でもヒソヒソとありもしない像を転校生に抱き、話し合っていた。

「今風かな？」

「古風かな？」

「いや、明治風だよ」

「いや縄文時代風に決まってる」

「間を取って戦国時代風だ！」

そう言ってる間に、スライド式の教室の扉は開け放たれた。

その瞬間、生徒達は口を閉ざし、話すことを止めた。教室の外からはまるで巨大なものが歩いているかのように、ズン、ズンと地鳴りが響いており、謎のいななきが響いてくる。

転校生は馬か何かだろうか。そう思うのも無理はなかった。

ズン、ズン、ズン

「我をここに呼んだのはうぬ等か!!」

「!!!!」世紀末風な人が来たあーーー!!!!」

扉から現れたのは 黒く巨大な馬に跨り、兜と鎧を身につけ、マントを羽織った少年だった。

城助が跨っている馬は、教室を一瞥すると大きく嘶いた。

「ヒビーン（おまえ等も蠟人形にしてやるうか!!!）」

(((馬は聖魔風だー!!!)))

城助は馬から降りると、身に着けていた兜や鎧を脱ぎ捨て、馬に乗せた。馬はそのまま教室を後して行った。

「天野城助ですっ！ よろしくおねがいます！」

「この空気の中で普通に自己紹介しよった!!？」

驚く生徒達を置き去りにして自己紹介をする城助に冷や汗をかきながら、先生はとりあえず場を取り繕うために城助に歩み寄り言った。

「あ、天野君……？ さっきの、お馬さん（？）はなんだったのかな……？」

「好きな食べ物はハンバーグです！ 嫌いな食べ物は、ところてんです!!」

（無視しよった!?)

「ところてんです!!!」

(2 回言った!? なんか恨みでもあるの!?)

「よろしくおねがいます!!」

『よろしくおねがいます!』

(馴染んだ!? 子供ってスゲー!!)

先生は驚きの連続で戸惑っている間にも、生徒達は城助との挨拶を済ませていた。実に飲み込みの早い良い子供達である。

先生は落ち着くために咳払いをすると、城助の座るための席を探した。ちょうど一つだけ空いている席があり、その場所に目を付けた。

「それじゃあ天野君は、後ろの『高町』さんの席の隣に座って」

「はい」

子供らしい返事 中身は大人だが をして指定された席に向う。窓際の席で、黒板もそこそこ見やすい。日光も直撃しないような位置にあり、熱いとも感じない。中々悪くない位置だ、と城助は思った。

隣には、先ほど先生が言っていた生徒である『高町』という女子生徒がいた。栗色の髪をツインテールにした中々可愛い女の子である。

社交辞令程度に城助は挨拶しようと思ひ、高町に話しかけた。

「君が高町さん?」

「高町なのは。なのはでいいよ!」

「うん。じゃあなのは。よろしく!」

「うん! 天野城助だよね」

「城助でいいよ!」

「じゃあ、城助君!」

「気安く呼ぶんじゃない」

「!!?」

「こうして、城助の学校生活は幕を開けた。

俺とところてんの様々な出会い

あらすじ：城助は転校した。

時刻は既に18時を回り、あたりはすっかり暗くなっている。そんな中、高町なのはは家に向って歩いていった。授業が終わって放課後を迎えたなのはは、つい最近自身のクラスに転校してきた男子、天野城助に校内の案内していて、帰る時間が少し遅れてしまったのだ。

「いそいで帰らないと。お兄ちゃんに怒られちゃう」

心配性の兄の事だ。きっと今ごろ玄関の辺りで待っているだろう。そんなことを考えながら歩く速度を速める。

その時、目の前に誰かがいることに気付いた。暗くてよく見えないが目の前に立つ人物はこちらをじっと見ている。

不審に思い、別の道から帰ろうかと思ったが、今の時間と家までの距離を考えるととても遠回りしている時間はないと判断し、少し不安な気持ちになりながらも目の前の人物に目を向けることなく静かに通り過ぎようとする。

その時だ。その人物はなのはの前にさっと立ちはだかり、道を塞いだ。なのははそのことに恐怖を感じ、足を止め、後ずさる。

「
ねえ」

目の前の人物は突如話しかけてきた。声からすると男だろう。なのははその時初めて男の姿をはっきりと見た。

とじろてんだ。

とじろてんが自身の行く手を阻んでいるのだ。

謎のとじろてんは虚ろな目でなのはを見つめてながら呟いた。

「お嬢ちゃん……とじろてんは好きかい？」

なのはは恐怖で震えて、何も言えなくなっている。それでもとじろてんは容赦なく詰め寄り、なのはに再度同じ質問をする。

「とじろてんは……好きかい？」

「そ、そつでもないです……」

やっとの思いでなのはが出せた言葉だった。

とじろてんはその言葉を聞くとがくと俯いた。

「そつか……とじろてんは…嫌いか。

なら……呪ってや

るううううううううううっ!!」

「キヤアアアアアアアアア!!!」

「ところてんに染まれええええええええ」

「なにやってんだテムエー!!!!」

「ギヤア!!!」

ところてんは恐ろしい速さで走り寄って来た少年、天野城助に強烈な飛び膝蹴りを喰らわされ、悶絶して呻いている。なのははその展開についていけず呆然としている。

その後城助は事情を説明させ、この事件はところ天の助の戯れであったということが分かり、再び天の助に強烈な蹴りを浴びせた。

これが高町なのはところ天の助のファーストkontaktである。

*

城助が私立聖祥大附属小学校に転校してから早くも1月が過ぎた。

その日も何事もなく授業を終え、学校生活の1日を締めくくる下校時の集会にて、先生がある伝達事項を生徒に向けて言った。

「最近、この近所に不審者が現れるという話がありました。皆は寄り道せずにお家に戻るようにしてね。知らない人に着いていかないように。もし怪しい人に声をかけられて連れて行かれそうになったら、大きな声を出して近所の人にわかるようにしてね。防犯ブザーなどの防犯グッズを持っているならそれも使うように」

周囲から「怖い」やら「気をつけなきゃ」などといった不安がるような声上がる。

「不審者だって。なんだか怖いね、城助君」

なのはもまた、少し不安がりながら隣に座る城助に話しかけた。

しかし、当の城助はその言葉を聞いてはいなかった。

なぜならば……城助はヘッドホンを耳に装着し、とても話なんか聞こえない音量で音楽を聴いていたからだ。

「ズンタッタ ふんふん〜ん」『シャカシャカ』

(ヘッドホン付けてるー！ 完全に話聞く気ない姿勢だよ!!)

リズムカルに体全体を揺らしていた城助の装着しているヘッドホンに目を向けたとき、なのはは違和感を感じた。

ヘッドホンの耳に当てる部分がまるで人の顔のようになっていたのだ。どうやって整えたのか分からない見事なパンチパーマ。額の

中心で異様な存在感を放っている巨大なほくら。目を閉じて安らかな表情しているその顔は、まごうことなき釈迦の顔であった。

『シャカ釈迦』

(これよくみたら釈迦だー!! しかもなんか釈迦がシャカシャカ言ってるー!!)

あるうことか、その顔だけの釈迦は自分自身で「シャカシャカ」と呟いていたのだ。

驚愕するなのはの視線に気付いたのか、釈迦は閉じていた目を瞬時に見開き、その目を充血させながらなのはを睨みつけ怒鳴った。

『おどりゃクソガキツ!! 見せモンじゃねえぞゴラァ!! 釈迦がシャカシャカ言って悪いか!!』

「こつち見た!? しかもどうでもいい理由で怒鳴られた!? 釈迦に」

『怒った俺はもう止まんねえぞ!! シャカシャカヘイ! シャカシャカヘイ!!』

「じるさいよ!!」

騒ぎ出した釈迦面を見る鬱陶しそうに見ているなのはに気付いた城助は、ヘッドホンを外してなのはに話しかけた。

「どうかしたか?」『シャカシャカ!!』

「やっと気付いた!! 城助君、そのヘッドホンどうにかして!!」

「ヘッドホン……?」

首をかしげながら城助は手に持っているヘッドホンに目を向けた。

『シャカシャカイエー!!! シャカシャカ釈迦釈迦!!!』

「……………釈迦がシャカシャカ言ってるじゃねえー!!!」

『ギヤアアア!! 釈迦になるー!! 本物のお釈迦になっちまうー!!!』

城助はヘッドホンをぐにぐにと針金のように曲げながら怒鳴った。釈迦面は苦痛で表情を歪め、くだらない駄洒落を言いながら悲鳴を上げている。

そのことに腹を立てた城助は一思いにヘッドホンをへし折った。するとようやく釈迦面の悲鳴は止んだ。

城助は真つ二つになったヘッドホンをゴミ箱に捨てて、ゴミ箱の中のヘッドホンに向かって唾を吐きつけた。

その一部始終を見た後で、なのはは一気に疲れが襲ってくるような感覚を味わい深く溜息をついた。

*

音楽を聴いていて先生のありがたいお言葉を完全に無視していた

俺に、なのはは呆れながらもちゃんと説明してくれた。

曰く、最近不審者が出没するそうだから気をつけるとのことである。

「こんな明るい時間に俺たちを連れて行くことする奴なんてあんまりいないよ。スクールバスだってあるんだ。よっぽど遅い時間になるか、人気のない道を通らない限り安心だよ。……………でも、用心するに越したことはないな。なのはは何か防犯グッズとか持ってるの?」

「うん… お母さんに防犯ブザーを持たされてるよ。いざという時に心強いからって」

そうやってなのはは鞆についたのストラップを掲げる。どうやらこれが防犯ブザーらしい。見たところ、ストラップの紐を引き抜いたらブザーが鳴るといふ一般的な物だ。

「へえ、しっかり用心してるんだな」

「うん！ 城助君はなにか持ってないの?」

なのははに尋ねられたので、俺は普段持ち歩くようにしている防犯グッズを取り出す。

「一応ね。でも大したものじゃあないよ。簡単な撃退グッズさ

ロケットランチャー」

「ロケットランチャー!!!?」

俺が取り出したのは、いろんなゲームでも定番の扱いを受ける『RPG 7』だ。

「不審者が襲ってきてても動きぐらいは止められると思うよ」

「一撃必殺だよっ!! てかそれどこから出したの!？」

なのははあたふたしながら俺の手にある武器を見ている。こんなでかいものを扱っているせいか、いつの間にかクラスの皆がこつちを見ていた。なんだかちよっぴり恥ずかしい。

「そんなに慌てるなよ。大丈夫だって。精々脅かす程度だから撃ちはしないよ」

「当たり前だよ!!」

それを聞いてクラスメイトも安心したのか、こつちを見るのをやめ、各々が会話を始めた。

なのはは少し疲れた表情をしている。あれだけ大声を出していたら疲れもするか。今のなのはには話しかけづらいな。こつなつた原因は俺にあるわけだし。

手持ち無沙汰になった俺は外の景色でも見よつと思ひ、窓の外に目

を向けた。

そして気付いた。

窓に天の助が張り付いていることに。

読者諸兄、考えてごらん下さい。あなたはクラスで窓際の席に座っている。暇になったから窓の外の景色を見ることなんて多々あるだろう。しかし、目をやった先にあったのは外の景色ではなく、窓に礫にされた巨大なところてんなんですよ。しかもそのところてん、こつちを見てるんです。じーっと、ね。とてもマヌケな表情をしていますよ。

「……………」

「……………」

長い睨み合いの末、天の助は俺に向かってニヤリと気味の悪い笑みを浮かべた。

その憎たらしい顔に大変腹が立った俺は手に持っていたRPGを構え、「野郎ッ」と怒鳴りながら躊躇せずに引き金を引いた。

ドゴオオオオオオオン
!!!!!!

「躊躇なく撃った!!」

砲撃の音に混じってなのはの驚愕の叫びが聞こえた。

俺の放ったロケット弾は、窓を突き破り天の助に直撃した。そのまま校庭まで落ちていき、派手に爆発した。

校庭にはロケット弾による焼け跡と、黒焦げになり倒れている天の助が残っていた。

「不審者がいた」

「確かに怪しかったけど!! てか脅かす程度にするんじゃないの
!?!」

「あの野郎には脅かす程度じゃ生ぬるい」

「何の恨みがあった?!」

「あの野郎、一昨日俺のカレーパンを食いやがった」

「それだけ!!?」

天の助を心配して、なのはは窓に駆け寄り、校庭を目やる。そこにはよろよろと弱弱しく立ち上がる天の助の姿があった。

「あッ！ 良かった、生きて」

「まだ息があつたかこの悪霊めええッ!!!!」

ドゴオオオオオオオオン!!!!!!

「天の助くうーんッ!!!」

「なに?」

「ええ、後ろ!? いつの間に!?!」

窓から身を乗り出して天の助を呼ぶのはに、突如後ろから天の助が声をかけてきた。

なのはは何がなんだか分からなくなっていた。

その後は天の助にもう2、3発ほど砲弾を喰らわせてやったところでカレーパンを食ったという無礼は許してやり、俺と天の助は仲良く笑いながら恒例の人力車ジャンケンをしながら帰ることにした。

教室を去るとき、なのはが先ほど以上に深い溜息をついていたように見えたのは気のせいだと思いたい。

*

パンツ！

乾いた音が静かな校庭に響く。それはなのはがクラスメイトであるアリサ・バニングスの頬を思い切り叩いた音だった。

驚愕した表情で頬を押さえながらなのはを見るアリサに、なのはは言った。

「痛い？ でも大事な物を取られちゃった人の心は、もっともっと痛いんだよー！」

「じゅっ……」

なのはの叫びにアリサは気圧され、一歩後ずさる。

ドゴォッ！！

鈍い音が静かな校庭に響く。それは城助が同居人であるところ天の助の顔面を容赦なく殴った音だった。

驚愕と苦痛で顔を歪め、吐いた血を拭いながら城助を見る天の助に、城助は言った。

「痛えか？ だがな、てめえに焼きそばパンを食われた俺の心は、もつともつと痛えんだよ！」

「だから……謝ったじゃんよお……」

「やかましい！ つい最近カレーパン食ったことを許してやったばかりなのに早くも同じことやる奴の言う事を信用できるか!!」

城助の怒号に天の助は恐怖し、後ずさる。しかし城助はそんな天の助を殴り殺さんばかりに拳骨を浴びせ続けている。

その2つの光景を見ている、なのはと城助のクラスメイトである月村すずかは、はたしてどちらを止めるのが正しいのかということに葛藤していた。

事の発端は、アリサがすずかが普段着けているカチューシャを奪い、それを取り返そうと必死に追いかけるすずかと、そんな彼女の様子を見て楽しんでるアリサを見かねたのはが怒り、アリサの頬を張ったところからである。

片やすずかの大事なカチューシャと強気になれない弱さが原因で、取っ組み合いの大喧嘩にまで発展している少女2人。

片や焼きそばパンを食われたという身内内の問題で、どこからかモーニングスターまで持ち出した一方的な虐殺にまで発展している少年とところてんの2人。

このように考えてしまえば、すずかがどちらを止めようと動くかは誰にでも予想が出来た。

取っ組み合っているのはとアリサに向ってこれまで出したことのないほどの大きな声で「やめて」と叫ぶ。

これまでおどおどして弱腰だった彼女が、強く叫んだことに驚いた二人は思わず掴みかかっていた手を下ろし、すすかを見た。

一方の天の助はどこからか大根と言う名の魔剣を取り出して城助の振り回すモーニングスターを弾いていた。

喧嘩をやめたのはとアリサは互いに謝り、またアリサはすすかに謝り、3人で話し合って一件落着となり、3人で仲良く帰っていった。

一方の天の助は真拳を用いて、城助の振り回す巨大な鍔に立ち向かっていった。

翌日、校庭でぼろぼろになって倒れてる少年とところてんが見つかった。

その周辺は、戦場跡地のように酷く荒れていたとのことである。

俺ととろてんの本編開始

あらすじ…皆と友達になった。

木々のざわめきが響き渡る深夜の森。ユーノ・スクライアはざわめく木々に囲まれながらうつぶせに倒れていた。

異世界からやって来たスクライア族の少年、ユーノはある使命を果たすため、この地球に降り立った。

彼の一族は遺跡発掘を生業としている一族である。その仕事の一つで、ある遺跡を調査している時、「ジュエルシード」と呼ばれる21個の宝石を発掘してしまった。「ジュエルシード」は「ロストロギア」と呼ばれる超高度な技術で造られた古代文明の遺産であり、使い方次第ではとてつもない大災害を招く危険性を孕んでいる。

その危険な代物がある事故で地球に散らばってしまった。ユーノの使命とは、散らばったジュエルシードを回収することだ。しかし、ジュエルシードの能力の副産物である化け物にあっけなく敗れ、取り逃がしてしまった。

『誰か…僕の声聞いて…力を貸して…！ 魔法の、力を…』

満身創痍のユーノは意識を失う直前で力を振り絞り、海鳴市一帯に『念話』と呼ばれる魔法を放った。その直後、彼の体をまばゆい光が包み込む。しばらく輝き続けると光は集束していき、やがて消えた。そしてユーノがいた場所には、一匹のフェレットが倒れていた。

*

『誰か・・・僕の声聞いて・・・力を貸して・・・！ 魔法の、力を・・・！』

高町なのはは意識が眠りに落ちている状態で、その声を聞いた。

しかし起きることなく、小さく呻いて寝返りを打ち、そのまま眠り続けた。

*

『誰か・・・僕の声聞いて・・・力を貸して・・・！ 魔法の、力を・・・！』

天野城助は唐突に聞こえたその声に驚いた。

そして一言呟いた。

「 来たか」

『来たか、じゃねーよ!! 早くトイレから出るよ!! もう漏れそうなんだって!!!』

天の助がトイレの扉を激しく叩く。用を足している城助からは扉一枚挟んでいる天の助の姿は見えないが、どのような状態になっているかは安易に想像できた。

しかし城助は怒鳴る天の助の事など関係の無いと言わんばかりに、とても冷静に新聞を読みながら便座に腰掛けていた。

「おまえもギリギリかい？ 俺も、ギリギリさ……来てるんだよ、でかい波が」

『かっこつけても訳わかんねーよ!!! いいから早く出るおっ!!!!!!』

騒ぐ天の助の声を聞き流し、城助は新聞のページをめくった。

*

高町なのはの部屋に携帯電話の目覚ましのアラームが鳴り響く。

起きるのが苦手なのはは目を閉じたまま手探りで携帯電話を取ろうとするが上手く取る事ができず、結果として携帯電話はベッドから落ちてしまった。普段なら面倒ながらも布団から這い出て携帯電話を取りアラームを止めるのだが、夜中に変な夢を見て熟睡できた気がしないのははそこで諦めてしまった。

アラームの音を無視して再び夢の国に入国しようとしていた矢先、突如部屋のドアが開く。

「なのは、いつまで寝てるの!! はやく起きなさい!!」

エプロンを装着し、おたまと鍋をカンカンと叩き鳴らしながら天の助が怒鳴り、部屋に入って来た。

「ほら、ちっさと顔洗ってきなさい!!」

「ううん・・・いま起きるから・・・天の助くん・・・」

そう言ってベッドからなのはが這い出てくるのを確認すると、天の助は部屋を出て行った。

なのははあくびをして、「変な夢見ちゃった」と一言呟くと、大きく伸びをしてようやくベッドを降り、洗面所に向っていった。

洗面所で顔を洗い、ツイントールに髪を整えて鏡で確認し終えた

時、ある違和感に気がついた。

「　　って天の助くんツ!!?」

長いノリツッコミを終え、なのはは足早にリビングに向う。廊下とリビングを区切る扉を強く開け放ち、部屋を見回す。

リビングには、食卓に着いて新聞を広げているなのはの父、土郎。そして台所に立つ母、桃子といういつも通りの光景　　ということはなく、食卓にはなのはもよく知る城助と天の助、その2人に向かい合うように座るゼリーの様に半透明でプルンと体を揺らした謎の人型生命体と、頭部が三角こんにやくできていて首より下が人間と同じ肉体を持つている生命体が、緊張した面持ちでテーブルに着いていた。城助は唖然としているなのはに気付くと「遅いぞ」と言った。「はやく席に着きたまえ」

テーブルに目を向けると、ゼリー状の生命体の横の席が空いている。どうやらそこがなのはの座るべき位置なのだろう。

訳も分からないまま、なのははとりあえず空いている席に座る。城助はそれを確認すると、席に座る面々を見回すとテーブルに両肘をかけ、両手を口の前に持って行きそのまま手を組む。

「さて、メンバーが揃ったところで　　我等『プルツとゼラチン連合』による裏切り一派豆腐共の活動拠点、豆腐道場の制圧作戦会議を始める」

「プルッとゼラチン連合!? なにそれッ!」

城助の発言になのはは思わず驚愕の叫びを上げる。

隣に座るゼリー状の生命体がなのはの方を向いて、顔をしかめながら怒鳴った。

「高町なのは部隊長、静粛に願おう!」

「部隊長なの私!? ってか誰!」

「異な事を! このゼラチンしゃかりきプルルンボーイのことを忘れたか!」

「名前ダサッ!! 言い辛い!」

このやりとりを奥の方で見ていたこんにゃく頭がテーブルに身を乗り出してなのはに言った。

「おいおい高町隊長。俺の事も忘れちゃったのかい? このトライアングルヘッドこんにゃくん様をよお!」

「知ってたら忘れないよ!! ロクな名前の人いないの!? いや人じゃないけど!」

「いい加減静かにしたまえ。高町、ゼラチンしゃかりきぶりゅっ……ぶるるんボーイ、トライアングルヘッドこんにゃく……こんにゃくん」

(盛大に噛んでる!?)

何故朝からこんなに疲れるんだろう、となのはは思った。そもそも彼らは朝から人の家で何をしているんだろう。家族は一体どこにいるんだろう。

様々な想いが交錯していると、突然視界が黒く染まっていき、やがて視界は漆黒で埋まってしまった。

意識が段々途切れていく不思議な感覚を味わいながら、「どうか夢でありますように」と最後に願った。

*

高町なのはの部屋に携帯電話の目覚ましのアラームが鳴り響く。その音に反応してなのはは飛び起きた。

息を切らしながら、怯えるように周囲を見回す。目の前に広がる景色は、よく見慣れた自室だ。それを確認すると、心の底から安心し、深い溜息を吐いた。

「なんか……変な夢見た……」

アラームが鳴り響く自室で、なのはは人知れず呟いた。

再び溜息をつく、未だに鳴り続けていたアラームを止め、着替えを始める。習慣となったその作業を終え、洗面所に向かい寝癖の多い髪を整える。整え終えたら、お気に入りのリボンで髪をツイントールに結う。一連の作業が終えたなのはは両親の待つリビングに向った。

リビングの扉を開けると、そこにはいつも通り台所で朝食の支度をする母、テーブルに着いて新聞を読みながらコーヒを啜る父がいるという光景。とは他に城助、天の助、ゼラチンしゃかりきブルンボーイ、トライアングルヘッドこんにゃくんの4人も父と同席していた。

6人はなのはの方を向いてにこやかに「おはよう」と言った。

なのはは頭を抱え天を仰ぎ、叫んだ。

「うるーーーーッ!!」

なのはの叫びは朝の町に大きく響いた。

*

普段より長く感じた朝を乗り越えた後は特に異常な出来事はなく、学校に向うスクールバスに無事に乗ることができた。バスには既に友人のアリサとすずかが乗っており、最後尾の広い席に並んで座っていた。なのはもその隣に並んで座り、いつものように談笑を始めた。

バスが出発し、窓のから見える景色が移り変わっていく中、なのはは談笑を続けながらゆっくりと振り向き、後ろの窓から見える景色を

見た。

「これなら通る…リーチ！」

「悪い天の助、それロン。親満」

「また城助君のアガリか」

「天の助さん、これでハコったね」

バスにワイヤーを引っ掛けて走る広い台車の上で城助達は麻雀をしていた。一見普通に麻雀をしているような会話だが、風圧で牌や点棒が飛び散り、とても麻雀が成立しているようには見えない。

しかし麻雀を知らないなのにとってそんなことは問題ではなかった。なのはの思考を埋め尽くしていたものはたった一つの違和感。

(まだなんかいる……)

城助や天の助と共にいたのは、朝の騒動の実行犯の2人、ゼラチンしゃかりきプルルンボーイとトライアングルヘッドこんにやくんだった。今朝の騒動のおかげで疲労困憊のなのははその光景にツッコむことはなく、速やかに視線を2人の友人に戻した。

この後、バスが海沿いの道路を走って少し急なカーブに差し掛かった時、「がたんツ」という音が後ろの方から聞こえた。そのすぐ後に海の方で4人ほどの「ぎゃあああああ」

という悲鳴が聞こえた気がして、その方向へ視線を向ける。既に遠

くなつた海の方で大きな水しぶきが見えた。それと同時に

「ぎゃああああ！ 冷てえー！！」

「溶けるー！ おれところてんだから溶けちまうー！！」

という絶叫が聞こえたような気がした。

まさかと思い、なのはは後ろの窓から城助たちがいる台車に目を向ける。しかし台車の上には誰も乗っておらず、雀卓がポツンと置かれていた。

なのはは隣に座る2人の友人に見られることなくほくそ笑んだ。

*

「将来かぁ……………」

昼時の屋上で、持参した弁当の中身をつつきながらなのはは呟いた。

前の授業で、担任の教員が将来のことについて話していたので、なのはは自然とそのことを意識していた。

弁当のおかずの一つであるタコさんウィンナーを頬張り、一緒に食事を取っているアリサとすずかにも将来についての話題を振る。

大企業の社長の御令嬢であるアリサは、勉強して社長である父の後を継ぐ、方やすずかは、趣味を生かして工学系で専門職に就く、といった像を持っていた。

なのは既に十分な将来のイメージを持つ2人に感心した。なのはアリサやすずかとは反対の方を向き、言った。

「城助君は何か……あれ？」

なのは話を振るが、本来そこにいるはずの人物、城助はなのはの視線の先にいなかった。

その様子を見たアリサが、「ああ、城助なら」と言って屋上の一角を指差す。「あそこでなんかやってる」

アリサの指が指し示す先には、水泳の飛び込みで使うようなジャンプ台が設置されていた。その下あるのはプールではなく、巨大な皿だった。中には野菜がたっぷり入ったスープが皿一杯に並々を注がれていた。無論、普段は台や皿は設置されていない。城助が用意したものだと思われる。そして当の城助は、そのジャンプ台の一番上に立っていた。

「近年、ロシアではとろてんボルシチがブレイク中であります!!」

『そんな「ト」ない!! そんな「ト」ない!!』

城助は肩に天の助を担いでいる。天の助を皿一杯のボルシチに投入しようとしているのだ。担がれている天の助は嫌そうな表情ではなく、むしろ誇らしげに腕を組み、望むところと言わんばかりに自信

満々の表情だ。

伝統的に継がれている料理に、とても合うとは思えない異物を混入しようとするのをボルシチに入った野菜達が黙って見過ごすわけではない。野菜たちは一斉にスープから顔を出し、必死に抗議している。

その凄惨な光景をととも見てはいられないと思ったのはは立ち上がり、城助に向かって叫ぶ。

「なにやってるの!! せつかくの完成されたボルシチの味と風味が台無しになっちゃっよ!!」

「やってみなきゃわかんねえだろーが!! 行くぞ天の助ツ!!!」

「叶えよう」

『うわあああああ!!!』

野菜達の悲痛の叫びも空しく、城助は容赦なくところてんをジャンプ台からボルシチめがけて投げ入れた。野菜たちの絶叫が響く。しかしそんなこととはお構い無しに、城助は無情にもボルシチをかき混ぜる。

城助はどこからともなく一枚の小皿を用意し、ところてんを入れて入念にかき混ぜたボルシチを小皿に注ぐ。

城助はそれを持ってなのはに駆け寄る。そしてなのはの前にテーブルを用意し、「へいおまち!」という声と共にボルシチをテーブルに置いた。

無言でなのははボルシチを口に含む。そして数回の咀嚼を経てボ

ルシチを飲んだ。

「いかかですかマダム？」

「天の助君、溶けて分かんなくなってるよ」

『「」ですよねー』

城助と野菜は目を合わせてニヒルな笑みを浮かべあった。

こうして騒がしい休み時間は過ぎていった。

*

放課後をむかえ、空が茜色に染まる頃、なのは、アリサ、すずかの3人は木々に囲まれた薄暗い裏道を歩いていた。

3人は塾に行く予定があり、一緒に塾までの道のりを歩いていた。その通り道にある公園に差し掛かった時、アリサが近道だと言って本来の道と違う方向へ言ったのがそもその発端である。

アリサにしてみればこの通りは塾への近道で、既に一度通ったことがある道だという認識だ。しかしすずかにとっては初めて通る道で、

人気もなく、辺り一面は木々に囲まれており、日没が近いこともあって薄暗い。加えて自分達は小学生でしかも女の子だ。少しの警戒心を持って周囲をキョロキョロと落ち着きなく見回してしまつのは仕方ないことである。それはなのはも同じはずなのだが、彼女はこの道を初めて通る道だという気がしなかった。むしろどこかで見たことがある、それも最近だ、という既視感を感じていた。

しばらく歩を進めると、なのはの脳裏に昨夜見た夢の映像が鮮明に思い出される。

(「……昨夜夢で見た場所……?」)

なのはは立ち止まり、疑うようにじつくりと周囲を見る。

そんななのはの様子見て不思議に思ったアリサとすずかも立ち止まり、不安そうになのはに声をかける。

「どうしたの?」

「なのは……?」

「っ！ あ、なんでもない。「ごめんごめん」

慌てて言うなのはに、すずかもう一度「大丈夫」と尋ねた。

なのはは首を縦に振って「うん」と元気よく言う。それを見て安心したアリサが出発を促し、3人は再び歩を進めた。

しばらくすると、今度はなのはの耳に「助けて」という謎の音が聞こえた。聞こえたというより、頭に直接響いた、といったイメージだ。突然の声に驚いたなのはは思わず立ち止まった。

「なのは？」

「今、何か聞こえなかった？」

「何か…？」

不思議そうな顔を2人に「なんか、声みたいな」となのは言う。

2人は更に不思議そうな表情になる。

「別に…」

「聞こえなかった、かな…」

2人はなのはの聞いた声は聞こえなかったと言う。

再び、なのはの頭に助けてという声が響く。今度は先ほどよりも強く聞こえた。

なのはは声のした方角に向って駆け出す。突然のなのはの行動に驚いたアリサとすずかは呆然としていたが、すぐに気持ちを切り替えなのはを追いかける。

己の感覚を頼りに走り出したなのはの先には、なにやら人影が見えた。

走る速度を上げ、さらに近づくとその人影が誰なのかはっきりと分かった。

「やあばーさんや、今日は立派なイタチが取れたぞ！」

「おやおや、じゃあ今夜はイタチの丸焼きにでもしようかしらねえ」

「わああああああ!!! 食べちゃダメー!!!」

なんと人影の正体は日本昔話みたいなお爺さんの格好をした城助とお婆さんの格好をした天の助だった。猟銃を肩にかけて持つ城助の片手には首根っこを摘まれて持ち上げられている一匹の小動物がいた。

城助はその小動物を一本の棒に紐で結んで吊るし、丸焼きを造るための形を整えたところであつとなのはのことに気がついた。

「おお、なのは！　これから晩飯だけとお前も食う？」

「食べないよッ!!」

「塩はダメか、欲張りさんめ……おい、ばーさんや。醤油を持ってきておくれ」

「あーよー」

「味付けの問題じゃないよ!!　ってかその子が可愛そうだから降ろしてあげて!!」

なのはに説得されて、城助は渋々小動物を降ろしてやる。

そのすぐ後にアリサとすずかが追いついた。

「びーしたのよなのは！　急に走り出し　　って城助、天の助も

「！」

「2人ともこんなところで何してるの？」

「俺らは晩飯の調達に来た」

「その最中になのはが現れたってとこだな」

そう言ってなのはの方を見る。すずかはその視線を追ってなのはを見る。そしてなのはの前にいた小動物の存在に気付いた。

「なのはちゃん、それ何…？」

「」
「」
「晩飯」

「違うよッ！！」

なのはの代わりと言わんばかりに答えた城助と天の助の言葉を、なのはは全力で否定する。

「動物…？ 怪我してるみたい…！」

「うーん、どうしよう…？」

「どうしようって…とりあえず病院！」

「獣医さんだよ」

「えーっと、この近くに獣医さんってあったっけ……？」

「うーん、この辺りだと、確か……」

「待って！ 家に電話してみる！」

なのは、アリサ、すずかの3人が慌しく動物の心配をして獣医を探している中、城助と天の助は

「王手、飛車取り」

「うーむこれはこれは…」

のんびりと将棋を指していた。

その後、無事その小動物を近場の獣医のところへ運ぶことができ、ようやく一息つくことができた。その小動物はフェレットの種類にあたる動物であることが分かった。フェレットの怪我自体は軽いものであるがひどく衰弱しているらしく、今晚は獣医に預けることにした。

なのは達は塾の時間に遅刻しそうになっていることに気づき、獣医と城助達に別れを告げると慌てて走り去っていった。城助と天の助も日没も近いということで獣医に別れを告げ、すり足で去って行った。足を擦るたびに天の助の足がコンクリートで削られていっているのに気が付いた頃には、既に天の助の下半身が無くなっていた。

俺とところてんと魔法少女

あらずじ兼説明・家に帰ってフェレットのことを家族に相談したところ、なんとか了承を得ることができたなのは、就寝の直前でまとも不思議な声を耳にする。内容は依然と同じ、助けを乞うもの。しかし以前よりも切羽詰まっているようで非常に慌ただしい。その声を発している存在が例のフェレットだと推測したなのはその身を案じ、日が落ちて夜の闇が覆う街を駆け出していく。件の医院の前で違和感を感じ、違う世界に迷い込んでしまったかのような不思議な錯覚を覚える。そして医院に目を向けると、フェレットが真っ黒な怪物に襲われており、大変危険な状況にあることは一目瞭然。なんとかフェレットと共に怪物から身を隠すことができたのはフェレット改め、ユーノから魔法の力のことを聞かされる。どうやらなのはにはその力を扱う才能があるらしく、ユーノは力を貸してほしいと懇願する。了承したなのははに教わりながら長たらしい呪文を唱えて変身。見事魔法少女としての力を覚醒させたなのはは、目の前にまで迫った怪物との激しい攻防の末、これの無力化に成功するのだった。

「リリカルマジカル、ジュエルシードシリアル

封印!!」

なのはの叫びに呼応して、魔法の杖ごとデバイスのレイジングハーフトが、ジュエルシードの思念体がけて桜色の光を放つ。光は思念体を貫き、まばゆい光が周囲を覆う。やがて光が収まると、思念体がいいた場所には小さな宝石、ジュエルシードが置いてあった。それに歩み寄り、デバイスの中に収めると、なのはは一息ついた。

その時だ。

「なんだ、もう終わってんじゃないか」

謎の声がなのはとユーノの耳に届いた。慌ててその声の方角に目を向けると、2人の男と一匹のペンギンが空中からこちらを見下ろしていた。2人の男の内の一人は甲冑のようなものを身にまとうっており、もう一人の中央に立つ男は色違いの鎧を装着し、マントを羽織っている。そのマントにはでかかと『G』という刺繍がされていた。そして左にはペンギンが腕を組んでいた。

「空…飛んでる……」

なのはは空を飛んでいることに驚いて、目を見開いていた。

対してユーノは、全く別の驚きが胸中を占めていた。

「バカな……『毛狩り隊』がなんでここに……!!」

「ほう、その動物は俺たちのことを知っているか。見たところそっちのガキはこの世界の人間みたいだが…おまえは別の世界の出身だな」

「ね、ねえユーノ君…『毛狩り隊』って、なに……?」

ユーノは恐怖で全身を震わせながら、不安そうに尋ねるのはに説明した。

「こことは違う、別の世界には……『マルハーゲ帝国』と呼ばれる国が存在していて、その世界を総べているんだ。そしてそのマルハーゲ帝国軍の実動部隊、それが『毛狩り隊』だよ……そして奴らは、度々別の世界に遠征して武力を行使する毛狩り隊の中でも戦闘慣れた部隊、『Gブロック』の連中だ……! しかもあの真ん中の男はGブ

ロックの隊長だ」

ユーノがなのはに説明している間に3人は地上に降り立っていた。ルーラーはユーノに対し感心のしたように「ほう」と言った。

「中々詳しいな、小僧。お前の言つとおり俺は毛狩り隊Gブロックの隊長、ルーラー様だ」

「俺は副隊長のクラブだ」

「同じく、ペングウィン」

なのはは強い恐怖を感じていた。生まれて初めてその身に受ける『殺気』というものに。他人の悪意すらまともに感じたことのないのはにとって、殺気なんてものは理解できない。3人の放つ殺気は、強烈なプレッシャーとなつてなのはを襲っていた。

そんななのはの様子を見て、ルーラーはニヤリと笑つ。

「やて、」と口でおまえらに言っておく。今すぐそのジュエルシードを渡せ。そうすればおまえたちは見逃してやるわ」

「バカな……ジュエルシードがどれほど危険なものか分かってないのか！ これは今すぐ封印して厳重に保管しておかなければならないものだぞ!!」

「そんなことは俺たちの知ったことではない。それにそのガキを見ている。見たところ戦いすら今回が初めてだろう。しかも魔導師になりたてで既に疲れ切っている。そんな奴が俺たちを前にして無事でいられるはずがない。おまえが変に長引かせれば、そのガキはプ

レッシュャーでおかしくなっちゃまうぞ、いいのか？」

「くっ…… マルハーゲ帝国の動きは逐一管理局に監視されている。おまえたちは隠れて動いているようだけど、君たちがこれを持ち帰ろうとすれば管理局にも気付かれる。そうなれば逃げられないぞ……」

「何をバカなッ。我々について知っているならば当然『真拳』のことも理解しているだろう！ 管理局の魔道師程度じゃ束になっても毛狩り隊には適わない。それは既に証明されていることだ！ そら、こうしている間にもそのガキは苦しそつにしているぞ」

ユーノとて、なのはの状態に気付いていないわけではなかった。ユーノ自身、強烈なプレッシュャーを感じている。ルーラーの言うとおり、なのははこれまで戦いを経験したことがない。ゆえにその身に受けるプレッシュャーはユーノの比ではない。

「なのは、ジュエルシードを出して」

「……でも、ユーノ君……」

ユーノは自分の都合で巻き込んでしまったなのはにこれ以上負担はかけたくないと思い、なのはにレイジングハートからジュエルシードを出すよう促した。

「いいから出してほしい。これ以上なのはがもたない」

「賢明な判断だぞ。それでいいんだ　むっ!？」

突如、ルーラーに向かって何かが高速度で飛来した。いち早くそれに気がついたルーラーは飛来する物体を拳を振るって弾く。しかしそれは弾かれることなく、ルーラーの腕にべっとりとこびりついた。

それはパイだった。

ルーラーは腕にこびりついたパイを拭い、それは飛んできた方向に目を向け、イラついた口調で言った。

「誰だッ!!」

「あ、あれは……城助くんと、天の助くん……?」

目を向けた先にいたのは、ユーノとなのはの恰好をした城助と天の助だった。

ユーノそつくりの着ぐるみを着た城助がグラスンをかけ、天の助の肩に腕をかけて、風船ガムを膨らましている。天の助はなのはと同じ服装で、城助と同じグラスンに加えてマスクもつけており、その手にはレイジングハートの代わりとして釘バットが握られている。そして二人とももう片方の手にパイを持っていた。

2人は同時にパイを持った腕を振るう。するとパイはすさまじい速度で飛んでいき、クラップとペングウインの顔面に直撃した。

3人は激怒した表情で城助と天の助を睨みつける。そしてルーラーが再び2人に言った。

「てめえら……何者だ？」

城助と天の助も額に青筋を浮かべて、激怒した表情で指をバキバキと鳴らしながら、目の前の3人に向かって言った。

「魔法少女だよバカヤロー……!!」

城助達が言った直後、ペングウィンが城助達に向かって走り出した。

「無礼が過ぎるな、キサマ……!」

城助と天の助は向かってくるペングウィンに対して身構える。しかしその直後、ペングウィンは加速し、その姿が見えなくなった。

「くっ！ 速いっ!!」

『ペンギン真拳奥義』

『皇帝の刻印』……!!

その声が聞こえた時には、ペングウィンは既に城助達の後ろにいた。

「かろうじて致命傷は避けたか……」この技を喰らった者は、その胸に

『ペンギン』の刻印が刻まれて死ぬ。殺すには至らなかったが、刻印は確かに刻んだぞ……!」

ペングウィンが言った直後、城助と天の助の胸に『ペンギン』という文字が刻まれた。2人は「ゴフツ!」と呻いて吐血した。

その様子を見て、ペングウィンは鼻で笑った。

「ふん、他愛ないな」

「それはどうかかな……? 自分の胸を見てみな」

「なに……なッ! じ、これはッ!!」

ペングウィンが自分の胸に目を向けると、そこには『タイムセール開催中! ペングウィン 980円!』と刻まれていた。

「こんな……い、いつの間ッ!!」

「『鼻毛真拳奥義 特売の刻印』」

「ッ!!! 鼻毛、真拳……だと!!」

その時だった。

遠くから強い地鳴りが響いてきた。まるでヌーの大群が走っているかのような、強烈な地鳴りが。

「な、なんだ、この音は……!!? ち、近づいてくるぞッ!!!」

「さあ、タイムセールの時間だぜ」

城助の言葉が聞こえたと同時に、その地鳴りの原因が姿を現した。

おばちゃんだ。

ヌーの大群を連想させる程の地鳴りを響かせて全力で突撃してくるものは、ありとあらゆる情報網を駆使し、様々なタイムセールの情報を嗅ぎつける一家の諜報員、家庭のCIA、地上最強の生物、主婦の軍勢だった。パーマのカツラを被り、エプロンを身にまとった主婦スタイルの天の助が彼女たちを先導している。

主婦達はペンゲウインを発見すると、「いたわ」「特売商品よ」と叫び、突撃してきた。

『AAAAALLALLALLALLALLALLALLALLALLALL
ALLAI!!!!』

「グハアッ!!!!」（このオレに痛みを感じさせることなく印を刻み、加えてこの威力の攻撃…コイツ、できるッ!!）」

主婦の軍勢による強い体当たりを受けながら、ペンゲウインは城助に心の中で賛辞を送った。

『『三角定規真拳奥義 線対称移動』』

城助とペンゲウインの戦いを見ていたルーラーが呟いた瞬間、主婦の体当たりを受けていたペンゲウインの姿が消え、いつの間にかルー

ラーの隣に移動していた。

「無事か、ペングウィン」

「ハア、ハア、グツ……油断していました」

「ペングウィンにここまでダメージを負わせるとは……それに」

ルーラーは城助と天の助に目を向ける。先ほどのおばちゃんたちは既に消えており、視線の先にいたのは鼻毛を自在に操る城助とおばちゃんの波に吞まれて身動きが取れずにそのまま地面に倒れこみ余す所なく踏まれまくってボロボロの天の助だ。

少し考えるような仕草をしたルーラーは、城助に対し興味と感心を含んだ視線を向けた。

「キサマ、『真拳使い』とはな……そこるところてんも同じか」

「今の瞬間移動は、おまえか？」

「ご名答、俺は毛狩り隊Gブロックの隊長、ルーラーだ」

「毛狩り隊……因果律のズレで生じた問題とはこれのことか」

城助たちが話しているのを少し離れた所で見ているのは、少し気になったことがあり、ユーノに尋ねた。

「ねえユーノ君、『真拳』ってなに……？」

「真拳っていうのは、使用者の個性を象徴する唯一の能力のことだよ。」

稀に複数能力を持つてる人もいるらしいけど、話に聞くだけで実際に存在しているかは知らない」

「さっき、あの人は魔道師じゃ真拳に適わないって言ってたけど…そんなに強い力なの？」

「桁違いだよ。あの力は人知を超えている。無から有を生み出し、物理法則をいともたやすく捻じ曲げる。能力によっては世界すら破壊できる……科学の延長線みたいな僕達の魔法じゃ到底太刀打ちできない。何人もの強い魔道師が毛狩り隊の隊長に戦いを挑んだこともあるけど、苦戦を強いられた末に勝つことができなかったという実例もあるんだ……」

「そんなに……でも、なんでそんな力を、城助君が……？」

「分からない……でも見たところ、非常に強力な真拳みたいだ。あのGブロックの副隊長にあそこまでの傷を負わせた人はいない。……もしかしたら、勝てるかもしれない……」

ユーノは期待の籠った目で城助と天の助を見る。しかし今の2人はメガネをかけてすごい速さでルービックキューブを解くことに勤しんでいた。

「遊んでるッ!!？」

「す、すごい余裕だ！ それほどの勝算があるのか!!」

「勘違いしないでユーノ君!! あの2人は純粹に遊んでるだけだよッ!!」

なのはが突っ込んでいる間にルービックキューブを解き終えた2

人はストップウォッチを見て「新記録だ」「最速だ」などと喜び合っている。

それを見ていたルーラーの額には、再び青筋が浮かんでいた。

「クソガキが…なめやがって……。おいキサマ、ここで一つ提案がある」

「ん、なんだ？」

「人数もお互いに3人はいる。ここでオレは『3狩リア』での戦いを提案しよう」

『3狩リア』だって…！ 聞いたことがあるぞ。互いのチームから代表者を3人ずつ出して戦うバトルロワイヤル。チームワークを駆使して先に相手の3人を倒したチームが勝利となるマルハーゲ帝国の伝統的決闘法…！」

「やっぱり知ってたッ！ ユーノ君詳しいね」

「だが、この法式はマルハーゲ帝国の伝統的な決闘法であると同時に、毛狩り隊最強の連携布陣でもあるはずだ。明らかにそっちが有利な提案じゃないか!!」

「嫌ならばそれでもいいぞ？ しかし、その時は我が隊の総員を結集し、キサマらを始末し、ジュエルシードを持ち帰らせてもらっつがなあ。この提案はキサマらにとっても有利な条件だぞ」

ルーラーの言うことに反論できる要素をユーノは持っていなかった。確かに現状で他のGブロックの隊員を呼ばれたら、一切の勝ち目がなくなる。城助の力量がどれほどのものかは分からないが、隊長格

を前にしてなのはを無傷で済ませることができるとは思えない。か
と行って『3狩リア』には3人の人員が必ず必要だ。城助と天の助は
問題ないが、まだ力が完全に回復していないユーノと、魔法も戦闘も
初めて経験して既に精神的に限界のなのはの2人では、到底最後のメ
ンバーとしての役割は果たせない。すぐに殺されて終わりだろう。

(なのはを戦わせるわけにはいかない…ここは僕が)

『3狩リア』による決闘…受け 「

「待て、少年」

そして、ユーノは自身を含めた3人で『3狩リア』による決闘を受
けることを言おうとした瞬間、肩を城助に掴まれた。

「おまえが行く必要はない」

「でも、なのはを戦わせるわけにはいかない！ 真拳は使えないけど、
困くらいはやってみせるさー！」

「違う、別に面子は呼んである」

そう言って城助は手に持った携帯の画面をヒラヒラと見せる。そ
こには「送信中」という文字が書かれていた。

「もつそろそろ来るはずだ」

城助が言った直後、2人のすぐそばの空間がぐにやりと歪んだ。

「結界に侵入!? 一体誰が!!?」

「来てくれたか。お待ちしておりましたよ

教頭先生」

歪んだ空間から姿を現した人物とは、以前城助が入学する際に面接官を勤めた私立聖祥大附属小学校の教頭先生だった。

「やれやれ、天野君、高町君も。小学生がこんな時間に出歩いてはいけませんよ。物騒な人に遭遇したら危ないでしょう」

そう言って教頭はルーラー達を一瞥する。

その一部始終を見ていたルーラーは側に控えるクラブに声をかける。

「おいクラブ、ちょっと確かめてみる」

「了解です。ルーラー様」

その瞬間、クラブの姿は消え、いつの間にか教頭の背後まで移動していた。

『』『霸王拳』!!!

そして凄まじい速さで振るわれた拳が、教頭の頭を捉えたかと思われたが、クラブの手にその感触がない。クラブの拳は、教頭の頭に当たる直前に、何かで阻まれていた。

「じ、これは…『カツラ』、か…?」

「やれやれ、最近の若者はキレイやすくていかんね。手を出してくる相手にこっちも黙ってはいられん 『カツラ真拳奥義 教頭パン

手』!!!」

「グハアッ!!」

教頭のから目にも留まらない速さで放たれた拳は、クラップの腹に直撃した。クラップは大量の血を吐いて、ルーラーのいるところまで殴り飛ばされた。

「や、奴も真拳使い…凄まじい威力…!!」

「実力は申し分ないな。さあクソガキ、『3狩リア』を受けるか！ 否か!!」

「望むところだ!! てめえら全員血祭りにしてくれる!!」

城助の怒号と同時に、全員が一斉に駆け出す。

毛狩り隊と城助たちの戦い火蓋は今切られた。